キユーピー通信

KEWPIE PRESS

2017 OCTOBER ● Vol.97

みんなで支えたい！

子どもの貧困

「子どもの貧困」と貧困指標
世界的に見ても高い貧困率
何が問題なのか？
“地域”が失われている!?
社会の子どもとして●国の取り組み／地域の支援
▶認定NPO法人 フードバンク山梨
長期休暇に食料支援を
学校との連携で支援を拡大
学習支援や料理教室も
▶一般社団法人 全国食支援活動協力会
「広がれ、こども食堂の輪！」
問題を発見する場所に
▶調布市子ども・若者総合支援事業「ここあ」
相談・居場所・学習支援の3本柱
子どもへの支援は種をまく事業
食卓の大切さを伝えていくということ
キユーピーみらいたまご財団

広報部から

愛は食卓にある。キユーピー

みんなで支えたい！

子どもの貧困

今年の国民生活基礎調査によれば、
依然として「7人に1人の子どもが貧困状態にある」ことがわかりました。
そうは言われても、一見豊かに見える現代の日本において実感がないという人が多いのも事実。
そこに現在の“貧困”の大きな問題があります。
貧困自体は昔もありました。ですが、核家族化や母子世帯が増え、
地域のつながりが失われる中、現在の貧困は見えにくくなっています。
そうした家庭に育つ子どもたちは、単に物質的に恵まれないというだけでなく、
本来あるべき人間関係やさまざまな体験の機会、将来への希望を奪われています。
その結果、未来への選択肢も狭められ、貧困は連鎖していくといわれます。
見ようとしなければ見えない貧困をしっかりと可視化し、
今すべきことを考える。
これは“待ったなし”で、
私たちに求められていることです。

「子どもの貧困」と貧困指標

実際にどれだけの子どもが貧困なのか。まずは統計的な数値を確認しておきましょう。

初めに述べたように子どもの貧困を示す公的なデータとしては、厚生労働省が発表している国民生活基礎調査から「子どもの貧困率」が挙げられます。全世帯の平均的な年間可処分所得（中央値）の50%を「貧困線」といい、可処分所得がそこに満たない状態を「相対的貧困」といいます。「子どもの貧困率」はそうした相対的貧困の家庭で暮らす18歳未満の子どもの割合を示しています。2015年の貧困線は122万円で、相対的貧困率は15.6%、子どもの貧困率は12年ぶりにやや改善されたものの13.9%です。

さらに、世帯類型別では、「大人一人で子どもを育てる世帯」の貧困率が50.8%と極めて高く、生活意識として「生活が苦しい」とする割合が母子世帯では82.7%に上り、厳しい状況に置かれていることがわかります。

子どもの貧困を示す手掛かりとしては、経済的理由により就学困難と認められる小中学生に支給される「就学援助」の受給率も挙げられます。文部科学省の統計では、この10年間で増加し続けており、2012年度には過去最高の15.64%に。これは公立小中学校に通う子どもの6人に1人の家庭が受給の所得制限を下回ることを示しており、ごく一般的な世帯においても「子どもの貧困」が進行していることを示しています。

【子どもの貧困率】

13.9%

資料：厚生労働省「国民生活基礎調査（2016）」より

改善されたものの まだ高い

【「生活が苦しい」とする母子世帯】

82.7%

資料：厚生労働省「国民生活基礎調査（2016）」より

半分以上が 非正規 就労者

世界的に見ても高い貧困率

先進国の中にあって、GDPでいえば世界第3位の経済規模である日本でも、国際的に見て「相対的貧困」とそこからくる日本の子どもの貧困率は高く、他の先進国に比べ、対策が遅れた国となっています。

経済協力開発機構（OECD）のデータによれば、日本の子どもの貧困率は15.7%と加盟国34カ国中で10番目に高く、OECD平均を上回っています。最も低いデンマークの3.7%、韓国の9.4%などと比べてもその高さがわかるでしょう。

また、先に挙げたひとり親世帯の貧困率50%超という水準は、OECDのまとめでは主要国でも最悪のレベルとなっています。

何が問題なのか？

では、実際に起こっている貧困の中で何が問題なのでしょうか？

最初に書いたように、まず貧困に陥った多くの家庭とその子どもたちが“社会から孤立し、忘れられた存在になっている”ことが挙げられます。

たとえば、そうした家庭では、子どもが一人きりで食事をする、ともする食事が用意されていないから食べないままということがあります。貧困世帯の多くが「ひとり親世帯」や「母子世帯」ですが、こうした世帯では、親が低賃金の非正規就労やパートタイマーの掛け持ちであるケースも多く、長い時間、家を空けざるを得ません。また、お金を切り詰めるために、どうしても空腹を満たすためだけの食事になりがちに。そうなると、本来親子がコミュニケーションをとる場であり、楽しいはずの食事への興味も失われてしまうでしょう。

また、経済的余裕が著しく失われると、子どもたちからさまざまな機会を奪ってしまいます。塾や習い事へは当然行かせられない。課外授業や修学旅行、弁当が必要な行事には参加させられない。あるいは、友だちに誘われてもお金がかかるから親に言い出せない……。

同年代の子どもたちが当たり前にしていることを同じように享受できない。それは引け目を感じるだけではなく、いじめや差別につながる場合もあります。さらに懸念されるのは、本来好奇心いっぱいなこの時期に、いろいろなことを諦めざるを得ないこと。こうしたことが続くと、子どもたちはさまざまなことへの興味や挑戦しようという意欲、未来への夢さえも失ってしまうのです。それは学力や学歴が低くなるリスクを高め、成人になってからの賃金や生活意欲、生産性の低下という負の連環を招く。いわゆる貧困の「連鎖」を生むことにもつながります。もちろんそれは、社会経済全体にとっても大きな損失です。

“地域”が失われている!?

ところが、現代では、格差社会が進むとともに隣近所という意識もどんどん希薄になり、他者への無関心も進んでいます。貧困についても「自己責任」として捉え、場合によっては疎外するという傾向もあります。そうした風潮の中で、貧困世帯の親は、むしろ周囲に困窮を悟られないようにし、相談する相手やSOSを伝える場所がないのです。

しかし、ある年齢以上の人に話をすると、昔はそんなことはなかったといいます。「隣近所で助け合うのは当たり前だったし、よその家でもよくご飯を食べていた。とこの家が困っているのかも見えていたし、よその子にも気を配っていた」と。それは“顔が見える”地域のコミュニティーが存在し、セーフティーネットになっていたということでしょう。各家庭の事情にかかわらず、子どもたちが一緒になって遊ぶ時間や場所もありました。子どもたちに居場所があり、そうした関わり合いの中で学び、また守られていたわけです。

社会から孤立した中で見えにくくなっている「子どもたちの貧困」を、いかにして可視化し、手を差し伸べていくか――。ここに一つのヒントがあるのではないでしょうか。

【ひとり親世帯の貧困率】

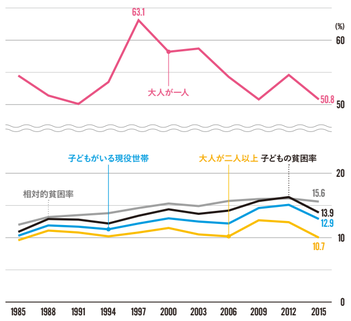
50.8%

資料：厚生労働省「国民生活基礎調査（2016）」より

比べものにならない 最悪レベル

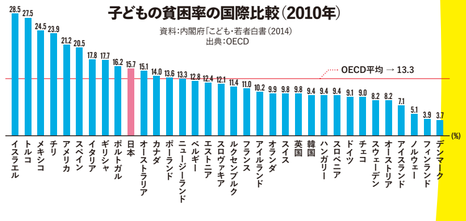
貧困率の年次推移

資料：厚生労働省「国民生活基礎調査の概況（2016）」



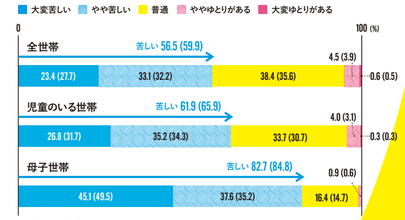
子どもの貧困率の国際比較（2010年）

資料：内閣府「こども・若者白書（2014）」
出典：OECD



各種世帯の生活意識

資料：厚生労働省「国民生活基礎調査の概況（2016）」



※（ ）は2013年の数値

国の取り組み

社会構造の中で一番の弱者である子どもが犠牲とされているのが「子どもの貧困」です。しかし、これまでそれは各家庭の問題、親の責任とされ、政策課題としては存在すら問われていなかったといってよいでしょう。2013年、政府は「子どもの貧困対策の推進に関する法律」を制定。ようやく積極的な姿勢を見せ始めました。

大いに期待したいところですが、実際に政策を実行に移すのは各地域、地方自治体です。一方で、すでに積極的に活動している民間の団体を支援することも必要でしょう。ただ、効果が出るにはまだまだ時間もかかりそうです。現在ボランティアが中心の民間の団体からは、その存続のためにも積極的な公的援助を求める声もありますが、実際にどれだけの予算をどのように振り分けることができるのかにも注視していきたいところです。

いずれにしても「子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されることのない社会を」という基本理念が理念で終わることのないよう、危機感を持って改革を進める必要があります。

Japan's effort

社会の子どもとして

子どもの貧困に取り組む現場からは、
想像を超える実情が見えてくるとともに、
切実な声も挙がっています。
それは、今まで気づいていなかっただけで、
決して他人事ではありません。

Support by the community

地域の支援

民間団体や個人の活動として動き出しているものとしては、たとえば、食支援・生活支援を行っている「フードバンク」や「子ども食堂」があります。

日本には、年間推計621万トン（消費者庁2017年4月公表）に達する、まだ食べられるのに廃棄される食品、「食品ロス」があります。食品関連の企業や市民からそうした食品の提供を受け、困窮世帯や施設などに無償で提供するというのが「フードバンク」の活動です。

そして全国に400カ所以上と広がりをみせているのが「子ども食堂」。基本は子どもが一人でも安心して来られる、無料または低額の食堂で、ボランティアの手で運営されています。単に「食支援」を行うということでなく、子どもたちの「孤食」を防ぎ、同時に子ども同士、あるいは地域の大人たちと触れ合うことができる交流の場にもなっています。

また、子どもたちの家庭の経済格差が教育格差につながり、さらに所得格差として世代を超えて連鎖しないように、無料で勉強を見る「学習支援」の取り組みも増えてきました。

認定NPO法人 **フードバンク山梨**

長期休暇に食料支援を

「一見わからなくても、ごく身近にいる子どもたちが明日の食べ物にも事欠く深刻な状況に陥っているのが現代の貧困です。『賛同から参加へ』とお願いしているのですが、一人ひとりが子どもの貧困に目を向け、食品の箱詰めなどのボランティアや、食品・お金の寄付など、できることから支援の一歩を踏み出してほしいのです」

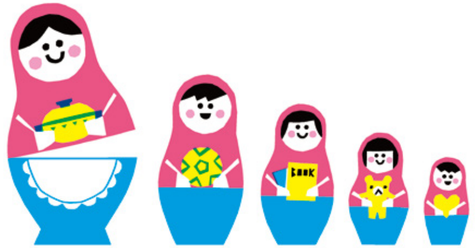
そう訴えるのは、認定NPO法人フードバンク山梨の理事長、米山けい子さん。米山さん自身、活動を始めた当初は支援を必要とする人がこれほど多くいることに気づいていなかったといいます。だから一人でも多くの人に参加してもらい貧困への共通理解を深めることが大切。それがまわりから孤立した家庭への、新たな縁につながっていくと考えています。

同法人では2015年から、学校給食のない長期休暇中に子どものいる生活困窮世帯へ食料支援を行う「フードバンクこども支援プロジェクト」を実施しています。企業や市民から寄付された食品の宅配と、学習支援やイベント企画で子どもたちの食と心を支える活動です。多くの人が参加できるように市民・企業・団体や、学校を拠点に食品を集める「フードドライブ」や食品の箱詰めの体験イベントなどを行っているのも特徴です。

「2014年に行った『子どもの食生活調査』によると、支援世帯の7割が1日1人あたりの食費が400円未満ということがわかりました。こうした家庭では栄養バランスに優れた給食が食べられない長期休暇には、十分な食事や栄養を摂れないため、痩せたり、体調を崩す子もいるのです」

宅配する箱には、米や缶詰などの食品と子どもたちが喜ぶお菓子や、手書きの手紙と返信用のハガキも同封されています。返信にはお礼の言葉とともに、支援に対して温かい気持ちになったことなどが綴られています。食品の支援だけではなく心の交流も、大きな支えとなっていることが伝わります。

第1回の127世帯288人から、5回目となった2017年夏のプロジェクトでは、546世帯1,129人の子どもたちに食料支援や学習支援などが行われました。



学校との連携で支援を拡大

学校との連携によって申請書を配布できるようになったことも、支援が必要な世帯を特定して、申請世帯数を広げることができた大きな要因です。

きっかけは、ある小学校の教頭先生からの一本の電話でした。

「ある児童が夏休みに学校へ来て『先生、何か食べるものない?』と聞いてきたそうです。そうした困窮する子たちをなんとかしてあげたいと思った先生からの申し入れで、学校との連携が始まりました」

最初はその1校から始まり、現在は合計78校の小中学校へ広がっています。市・教育委員会と協定を結び、「就学援助利用家庭」および「教師が必要と感じる子ども」を対象に学校から申請書を配布する仕組みです。

先生方へのアンケートの回答を見ると、5割が衣服の汚れやほころび、支払いや集金の未納などを通して、貧困に気づく機会はあるそうです。ただ、保護者のプライドなどを考えると介入できずに悩む先生の姿も浮き彫りになりました。また日本特有の恥の文化で「人に知られたくない」「人に世話になってはいけない」という風潮があり、なかなか先生に相談できない保護者もいます。

子どもの貧困がわかっていても、その実態が見えない社会の中で、プロジェクトを学校・行政と連携して進めることで、これまで支援の手が差し伸べられなかった子どもたちの心と体を支えています。

メニューは子どもたちでも作れて、楽しく食べられるものを用意。
真剣なまなざしに、説明するキューピー社員も熱が入ります。

学習支援や料理教室も

「フードバンクこども支援プロジェクト」では、食料支援と併せて、学習支援やレジャーを楽しむイベントなども行っています。「支援している世帯では、経済的な理由で塾に行けない、親が仕事で手いっぱいのため宿題を見てもらうことができない子がいます。夏休みにどこにもレジャーに行けない、という声もありました。1日でもそうした機会を持つことで、子どもたちが夢を持って成長できればいいと考えています」

夏の思い出づくりをする「フードバンクキッチン」ではバーベキュー大会を実施。学習支援としては、学生や元教師のボランティアと一緒に、1日夏休みの宿題などに取り組む「くれよんひろば」を開催しています。その中には昼食時に一緒に料理を作って、食べ物の話を聞きながら、一緒に食べる食育のプログラムも。その活動にはキューピーグループも協力しています。

富士吉田キューピーからは、出張・手作りマヨネーズ体験教室が。みんなで協力しあって、マヨネーズ作りに挑戦!

10時から昼食を挟んで、15時まで勉強タイム。最後に渡される修了メダルとお菓子のご褒美も、うれしい思い出です。

ハムを挟んだり、ジャムを塗ったり。くるくる巻いてロールサンドのできあがり。ボランティアの協力でサラダやミネストローネも添えられました。

フードバンク山梨が行ったアンケートより

あなたにSOSが聞こえていますか?

- 弟、妹にごはんを食べさせるため、**自分はあまり食べない**という子がいる。
- 学校期間中は給食があるので困ることはないが、**夏・冬休み期間中は食べることに困るだろうと思った。**
- **運動靴がボロボロ**で何年も使っているようであった。

教育機関向けアンケート調査から

- 配送にいたるまでをニュースで見ました。**たくさんの人に支えられて、たくさんの人の愛があって私達は支えられているのだな**と感じました。
- 僕も大きくなったら**人のために何かやってあげたい。**

宅配した食料支援の返信から

- 食事がお通夜のよう。
- 「**これを食べたら朝ごはんあるの?**」と子どもが泣き出した。
- **いつもお腹を空かせていた**

子どもの食生活調査 2014 から

一般社団法人 **全国食支援活動協力会**

「広がれ、こども食堂の輪!」

「子どもたちが集まると、必ず上の子は小さい子の面倒を見ます。子どもは子どもの集団に入れてやらないと自発性や自分で何かを見つける力が育たない。子どもにとってそういう居場所をつくってあげることが大切なのです」

そう語るのは、「広がれ、こども食堂の輪!」全国ツアー実行委員会副代表である平野覚治さんです。今、全国に400カ所以上と広がった「子ども食堂」ですが、単独では弱い。ツアーの開催には「子どもに関係するグループに横串を刺してネットワークを広げ、問題点を共有していきたい」という思いがあります。「一部の人たちの取り組み」から「地域住民の誰もが理解し関わっていける取り組み」に広げて地域に定着させたいということでもあります。

また、子ども食堂が必要な理由の一つは、子どもたちにみられる「孤食の連鎖」だといいます。

「食事は人と人を結びつける営みでもあって、一緒に食べたり飲んだりすることで、気持ちのやり取りをするのは日常的なことでした。ですが、今の30代の親世代は親自体が大勢で食卓を囲んだ経験が不足しているのでは…。子どもたちは一人で食べる、孤独って意味さえわからなくなってきているところに問題の深刻さを感じます」

食事に限らず問題なのは、いろいろな経験をしないまま大人になっていく「体験の貧困」とその連鎖が大きいのではないかとも案じています。

問題を発見する場所に

「子ども食堂」にとって大切なのは、地域住民の多世代の人と触れ合える交流の場になることでもあります。

「食べることは大事ですが、週1回、月1回の食支援でそれを解決するというのには少し無理がある。食事はツールだと思うんです。食支援であれば、地域の誰でも担い手になれるし、参加もしやすい。ある時は受け手に、またある時は担い手にもなり、ずっと付き合っていくことができる。食事には人をつなぐ力があるんです」

大切なのは地域に根付き、そこが子どもたちの抱える問題を発見する場所になりうるということ。そして集まった人たちで解決法を考えて、次の支援へとつなげていく。それが大切なのではないでしょうか。

調布市子ども・若者総合支援事業「ここあ」

相談・居場所・学習支援の3本柱

調布市からの委託を受けて調布市社会福祉協議会が2015年10月に立ち上げた、子ども・若者総合支援事業が「ここあ」です。「相談」「居場所」「学習支援」の3本柱で、若者の問題の窓口が「相談」であり、不登校や引きこもりの子どもたちを受け止めるのが「居場所」。経済的事情のある世帯の中学生を対象にしているのが「学習支援」です。

学習支援では、経験豊富な元中学校教諭の学習コーディネーターとともに、登録した大学生のボランティアがマンツーマンで子どもたちに接するのが特徴です。その意図について、リーダーの新田倫永さんはこう言います。

「ここに来る子どもたちは見た目には普通の子どもと変わりません。ただ、接していると、幼さや他者との関わりの経験に乏しさがあって、経済的な貧困だけでなく、人との付き合いを苦手にしている子も多いのです。年齢も近い大学生とのマンツーマンであれば、安心して自分のペースで取り組めるので、学習意欲の向上や、学習習慣の獲得につながると考えています。またそこから、人との接し方や多様なものの見方も学べればと思っています」

子どもへの支援は種をまく事業

学習支援に訪れる中には不登校の子どもが1/4ほどいることから、「ここあ」では、子ども同士の関係づくりや、人間関係も含めて「場所」を必要としている子どもたちがいかに集まりやすい場をつくるかに尽力しています。加えて、外部の力も借りて、いろいろな社会との関わり、つながりを知る機会を設けています。今春から試みている夕食作りもその一環。旬の食材を使って大人と一緒に料理を作り、一緒に食べることにより、コミュニケーションの大切さを学んでいきます。

「子どもを支えるのは、種をまく事業だなと感じています。『ここあ』で支えた子どもたちがここを卒業して、支えられた経験から支える側になってくれたら…、人が人を支える気持ちがつながる社会をつくるきっかけになっていくのではないかと期待しています」

大勢で食卓を囲み、自分たちで作った料理を味わいます。好き嫌いはあっても手作りは格別。自然と会話は弾みます。

料理に挑戦。包丁使いも慣れている子、不慣れな子とさまざま。集団の中で役割分担をするという体験を学びます。

「キユーピーあい」で朝、収穫された野菜を使ったサラダと目玉焼き入り「おにぎらず」

キユーピーグループの社員による講義。旬の野菜や栄養などの話を交えてメニューの説明を。きちんと食べることの大切さや興味を促します。

NOTE BOOK

from KEWPIE

食卓の大切さを伝えていくということ

では、食に携わるメーカーとしてキユーピーにできることは何か。まずは食育活動を通して、本来の「食卓」の大切さを伝えていきたいとCSR部部長 石橋弘行は語ります。

「2016年に開催された『こども食堂サミット』(※)や、各種のセミナーに社員が参加し、『子どもの貧困』に対して何ができるかを考えてきました。そこで気づいたのは子どもたちから『食卓』が失われていることでした。『食卓』は本来、人が最もリラックスして、会話を楽しみ、共感やコミュニケーションを学び、人間関係を育むことができる場所です。子どもたちを支援するさまざまな団体と協力しながら、われわれだからこそ伝えられる経験の場を提供できるのではないか」

現在、フードバンク山梨の「フードバンクこども支援プロジェクト」の学習支援と調布市「ここあ」の子ども・若者総合支援事業、それぞれの中で子どもたちと一緒に料理を作り、食についての興味を深める体験型の食育活動を行っています。まだ始まったばかりですが、さまざまな団体と連携し、意義ある活動にしていきたいと考えています。

(※)こども食堂サミット:2015年、NPO法人「豊島子どもWAKUWAKUネットワーク」によって1回目が開催される。各地域で子どもたちの食を支えている子ども食堂が集まり、シンポジウムや交流会を通して子ども食堂の意義を語り、ネットワークづくりをする。年を追うごとに参加者も増え、活動が全国へ広がるきっかけにもなっている。

キユーピーみらいたまご財団

2017年4月に「食」を取り巻く社会課題に貢献するため、「一般財団法人　キユーピーみらいたまご財団」を設立しました。

この食を取り巻く社会課題はますます多様化し、増えています。その中で、従来からの取り組みを進展させるだけでなく、広く外部の団体をも支援することで、今まではできなかった社会貢献を行うことが目的です。公募による2017年の支援対象は、食育活動や子ども食堂などの食を通じた場づくりに取り組む団体です。

「10月2日の支援団体の授与式では、子ども食堂に取り組む方々を招き、パネルディスカッションを行いました。こうしたことが同じ課題に取り組む人同士の横の連携を深める一助にもなり、より包括的な支援が可能になります」

このような機会を経てキユーピーグループとしても、さらに知見を深め、次の活動に生かしていきたいと考えています。

見えにくい子どもの貧困ですが、そこにしっかり目を向けてみれば、それが最優先で取り組むべき社会課題であることがわかってきます。企業にとっても、こうした社会課題に向き合うことは、当然の責務であるといえるでしょう。窮地に陥った、なんら罪のない子どもたちに手を差し伸べるためには、国はもとより、団体、個人、企業がそれぞれに活動するだけではなく、問題を見据えて連携していくことが必要でしょう。またこの問題を知ってもらうため、広く発信もしていきたいと思います。

今そこにいる、未来の希望である子どもたちのために、キユーピーも持続的な支援を進めていきます。

INFORMATION
広報部から

NEWS

1 「キユーピーライト」を全面刷新

「キユーピーライト」は、キユーピーのマヨネーズタイプ調味料で最もカロリーを抑えた商品として、カロリーを気にする人を中心に支持を得ています。
今回の全面刷新により、さらに「おいしさ」「健康感」を訴求し、健康的で満足感のある食生活の実現を支援していきます。

❶“香り”に着目し、卵のコクとうま味を向上

新たに開発した「卵香味油（たまごこうみゆ）」を加え、卵のコクとうま味をより感じられるようにしました。

❷さらなるカロリーカットを実現

カロリーカット率（当社マヨネーズ比）を、従来の75%から80%に高め、大さじ約1杯（15g）あたり20kcalとしました。

❸賞味期間を10カ月から12カ月に延長

独自技術の「マイクロエマルション製法」と配合の変更により、植物油の量を当社マヨネーズの20%未満に抑えながらも、マヨネーズらしいコクや口どけを実現。品位向上にともない、賞味期間を製造後10カ月から12カ月に延長します。

マヨネーズらしい卵の香りを詰め込んだ香味食用油

2 飲む人のための「よいとき」を全面リニューアル

「よいとき」は、キユーピーグループ独自の醸造技術により世界初の大量生産を実現した、酢酸菌酵素を配合したサプリメント。2粒に酢酸菌1億個分の酢酸菌酵素を配合しています。酢酸菌に含まれる酢酸菌酵素は、ろ過する前の状態の酢「にごり酢」に存在します。マヨネーズの重要な原料として長年グループ会社で製造を続けてきた酢。その酢造りに欠かせない酢酸菌が持つ酢酸菌酵素に着目し、独自の製法で酢酸菌酵素を高濃度に含む「にごり酢」の大量生産に世界で初めて成功しています。

❶お求めやすい価格に変更

2粒入りで税抜き230円→180円へ。

❷ターゲット拡大にともない、パッケージを刷新

30代の働く女性に加え、40～50代のビジネスマンもメインターゲットに設定しました。さらに商品名を「よ・い・と・き」から「よいとき」へと変更し、シャープさを印象づけます。

TOPICS

1 デリア食品直営 サラダ専門レストラン EVERYTHING SALAD 青山

デリア食品株式会社は、直営サラダ専門レストラン第一号として、「EVERYTHING SALAD 青山」を5月にオープンしました。“野菜はなんでもサラダになる”をコンセプトに、おいしいから毎日食べたくなるサラダと野菜料理を通して、いろんな野菜をたっぷりと食べるライフスタイルを提案していきます。現在、秋メニューを展開中です。

- いろんな野菜を、いろんな調理法で➡一つのサラダの中に多種の野菜が調理法を変えて使用されています。色合いや味わいの変化が楽しめます。
- メインはサラダ➡昼、夜を通じてサラダをメインにした食事ができます。
- 17時以降は小皿料理、グリルで➡お酒に合う野菜料理が充実しています。
- つくりたてにこだわって➡注文を受けて目の前でサラダを仕上げ、一番おいしいタイミングで提供します。

↑ エブリシングサラダ

季節のフルーツとカッテージチーズのサラダ →

2 【研究報告】

キユーピーは、マヨネーズの機能を生かした調理の工夫について研究を進めています。マヨネーズを使って食材の「臭い」を抑えて食べやすくすること、マヨネーズで食感の改善効果がみられることについて日本調理科学会で発表しました。
（詳細は、キユーピーアヲハタニュース2017 No.57-58参照）

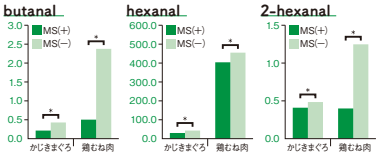
報告1 肉や魚料理の臭いが抑えられ、食べやすくなります。

[概要] サンプル調整

▶ かじきまぐろのマヨネーズ焼き
さいころ状に切り、表面にみじん切りのパセリ・パン粉・マヨネーズを合わせたものを塗り、オーブントースターで焼いた群を【MS（+）】。マヨネーズを加えない群【MS（−）】は、同量の大豆油を加えて調理。

▶ 鶏むね肉のマヨネーズ焼き
ひと口大の鶏むね肉をマヨネーズに10分間漬け込んだのち、油をひいたフライパンで焼いた群をサンプル【MS（+）】。【MS（−）】は、マヨネーズに含まれるのと同量の食塩を加え、漬け込み。

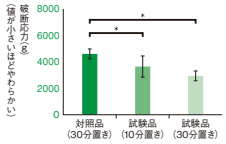
[結果] 各サンプルの臭い成分（butanal、hexanal、2-hexanal）を分析したところ、【MS（+）】で臭い成分が有意に減少した。



報告2 鶏むね肉を10分漬け込むだけで、しっとりやわらかくジューシーに焼き上がります。

[概要] サンプル調整
鶏むね肉にマヨネーズをもみ込み、一定時間冷蔵。漬け込み後、210℃のオーブンで10分間焼いたものをサンプルとした。鶏むね肉は厚さ2㎜のスライスとし、対照品はマヨネーズに含まれる量と同量の食塩で漬け込みを行った。

[結果] 10分間、30分間ともに対照品と比較して有意にやわらかくなった。漬け込む時間が長いほど破断応力が小さくなった。



P.S.

広報部だより

●二年前に一念発起して、スイミングスクールに通い始めました。苦手だった水泳を克服するためです。クロール、背泳ぎ、平泳ぎときて、今はバタフライを習得中。私が通うスクールには、まだオムツがとれない幼児のクラスから選手育成コースまで、幅広いコースがあります。習い事ができる子の世帯は、通わせるだけの経済的なゆとりがあるのでしょう。
子どもの貧困で問題なのは、経済的な貧困の連鎖だけでなく、「経験・体験の貧困とその連鎖」であることを知りました。人はさまざまな経験を通じて、物の見方・考え方、将来への可能性・希望など多くのことを感じ取るのだと思います。だからこそ、この問題は根深いのでしょう。私事ですが、長年携わったこの仕事から離れることになりました。この冊子は薄いですが、一冊作り終えるごとに成長を感じられる貴重な“経験”の場です。ありがとうございました（Y.T）

バックナンバーをご希望の方は広報部までご連絡ください。

キユーピー株式会社　広報部
〒150−0002 東京都渋谷区渋谷1−4−13　TEL 03−3486−3051（直通）　FAX 03−3486−6150